

Title	使役表現の選択に関わる意味素性
Author(s)	由本, 陽子
Citation	Osaka Literary Review. 22 P.28-P.40
Issue Date	1983-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25598
DOI	10.18910/25598
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

使役表現の選択に関わる意味素性

由 本 陽 子

1. 英語の使役表現には、以下に示す2種類の形がある。

- (1) a. John moved the rock to the corner of the garden.
b. John made his son move to the corner of the garden.

一般に(1a)のような使役の他動詞による単純形を語彙的使役文(Lexical Causative), (1b)のように *make, have, get* 等の使役の助動詞と不定詞とから成る複合形を迂言的使役文(Periphrastic Causative)と呼んでいる。

この2種の使役表現が、異なる深層構造をもち統語論的には別箇のものとして扱われるべきである事は、もはや議論の余地がないと思われる。¹⁾しかし、この表現形式の選択がいかなる意味的要素に支配されているかという問題は、再検討の価値がある。

2. 過去の研究においては、しばしば二種の表現の意味は使役の様態に関して異なると説明されている。原則として、指示的(Directive)²⁾及び間接的(Indirect)使役は迂言形で、物理的(Physical)及び直接的(Direct)使役は語彙形で表現される。(1)は物理的対指示的、(2)は直接的対間接的の対照を示している。

- (2) a. John opened the door by kicking it.
b. John caused the door to open by pushing Mary against it.

(Yamanashi 1977)

しかし、表現形式の引き金あるいは識別素として使役の様態を意味表示に記載しても、それは単に使役状況を分類しているにすぎず、なぜ指示的使役と間接的使役が迂言的に表現されるのかといった問題に説明を与えるものではない。

Shibatani (1975:71) は、使役の表現形式は話者がその使役状況をいかに概念化するかによって決定されると考えている。使役状況が原因と結果の一体化した単一の事態として概念化される場合は語彙的に表現され、原因・結果二つの事態から成るものとして概念化されると迂言的に表現されるというのである。そして被動者 (causee) の意味的格は、前者では Patient、後者では Agent であると解釈されている。

これは直観に合った説明の様に思われるし、又、時や場所を表わす副詞句の作用域に関し、2種の表現形式が(3)の様な差違を示す理由の説明としても説得力がある。³⁾ 彼の分析に従うと、単一の事態の叙述である語彙形には単一の時(場所)を表わす副詞句しか起こらないのは当然と言えるだろう。

- (3) a. John caused Bill to die on Sunday by stabbing him on Saturday.
b. *John killed Bill on Sunday by stabbing him on Saturday.

しかし、Shibatani の説明は使役状況の概念化形式を漠然と被動者の意味的格と関係づけている点で問題がある。彼の提示した認識論的な原則には、より確固とした意味論的裏付けを与える必要があると思われる。

要するに我々が問題とすべき点は、指示的及び間接的使役など、迂言的に表現される使役状況のいかなる特性が、原因と結果を分離して概念化することを促すのかという事である。本稿では、すべての使役文の意味構造を原因の事態(以下「原因」と略す)と結果の事態(以下「結果」という)2つの事態間の関係として表わす分析に基き、⁴⁾ その表現形式の選択に影響する意味素性を抽出していく。これは述語自体の素性でも、また使役の様態を表わすものでもなく、各事態の叙述を特徴づけるより一般的な意味素性である。そして、最終的には、結果に対する原動者 (causer) の全面的支配を認識する上で支障となる要素が、迂言形の引き金となっている事が示される。

尚、本稿の枠組は Shibatani (1975) を規範とし、述語の中核的意味に加え、ここで抽出される意味素性が各事態を特徴づけている様な意味表示を

基底構造と考えている。

3. まず指示的使役を迂言形へと導く要因について考察する。次の文の逸脱性は、被動者がAgentと解釈されない名詞句である為に指示的使役の解釈が成立しないという事に起因すると説明される場合が多い。

(4) a. ?John made the rock move to the corner.

b. ?John made the sleeping baby move.

ここで Agent を Fillmore (1968), Gruber (1967) などの定義に従い、「行為を引き起こす有生 (animate) のもの」と理解すると、(5)や(6)の場合も(4)同様逸脱するはずである。しかし、実際には(5)(6)は指示的使役を表わす適格文なのである。

(5) John made Mary stay at home.

(6) I made Mary get examined by the doctor.

つまり、指示的使役における被動者はAgentであるとは言えないことになる。この問題は、従来のAgentという概念自体にも疑問を投げかけるものである。⁵⁾

では、(5)(6)も含め一般に指示的使役を特徴づけるのはいかなる特性であろうか。ここで我々は結果の性質に注目すべきである。指示的使役では物理的使役と異なり、被動者が必ず意志をもって結果を導く、そこで Cruse (1973) で次の様に定義されている VOLITIVE という素性を抽出すれば、指示的使役ではすべて結果がこの素性を与えられているという一般化が可能となる。

VOLITIVE: 主体の意志に基いて起こる事態を特徴づける素性
([VOL])

次に結果が [VOL] である他の状況を考える。

(7) a. Monday's snowfall caused the workers to stay at home.

b. ?Monday's snowfall kept the workers at home.

(Yamanashi 1977)

- (8) a. Susan's screaming caused Fred to run away.
 b. *Susan's screaming ran Fred away.

この場合もほとんど語彙形は許されない。又、*speaking, singing, dancing* など [VOL]の事態のみを表現するという内在的特性をもつ動詞には、対応する他動詞（語彙形）が存在しないという事実も留意すべきである。

以上の観察はすべて、結果が[VOL]で特徴づけられる使役は迂言形となるという原則により説明できる。(1a)と(1b)の違いは、使役の様態の違いよりむしろ結果が[VOL]か[~VOL]かの違いに帰する方がより説明力がある事になる。

4. この節では、FillmoreらのAgentの定義のうち、「事態を引き起こすもの」という性質について考える。これを事態を特徴づける性質として抽出したのが、Cruseの定義するAGENTIVEという素性である。

AGENTIVE: 遂行されるにあたり、主体自身のエネルギーが用いられる
 ([AG]) 行動を特徴づける素性

この意味素性は、例えば*fly*(他動詞)の選択制限を述べる際に有用である。

- (9) John flew the hawk /the model aeroplane /?the stone.
 (Cruse 1973)

Cruse (1973: 22)に基けば、*fly*は語彙項目エントリーにおいて結果が[AG]であると既に指定されているため、目的語がその主体として適切なものに限られる。この様に、我々は動詞の目的語に関する一見 ad hoc な選択制限をも、体系的に記述する事ができる。

[VOL]は有生物を主体とする事態に限り与え得るのに対し、[AG]は自然力（風や熱）・機械等の引き起こす事態にも与えられる。これらは、我々の体系では[AG] & [~VOL]で特徴づけられることになる。

ところで、[AG]に類似した素性が行動以外の事態についても認められるようである。これは、Inoue (1973)がSelf-changeabilityと呼んでいる

概念で、彼女に従うと次のような素性が抽出できると思われる。⁶⁾

SELF-CHANGEABLE: 主体自身のエネルギーにより、あるいは自然
 ([S-C]) 発生的に起こる状態変化を特徴づける素性

では、以上の2種の意味素性は使役表現の選択にいかに影響するだろうか。

- (10) a. John made the car start.
 b. John started the car.
- (11) a. *John made the meal start with soup.
 b. John started the meal with soup.
- (12) a. The sun will make the roads dry up.
 b. The sun will dry up the roads. (Inoue 1973)
- (13) a. *John made his hands dry on the towel.
 b. John dried his hands on the towel.

ここで我々が抽出した素性が、述語自体に与えられているものでない事に留意すると、(10)(12)では結果に [AG] あるいは [S-C] を与えられるが、(11)(13)では同じ動詞が用いられていても、結果がこれらの性質を欠いていると考えられる。例文の容認性の違いから、[AG], [S-C] は、表現形式の選択において [VOL] ほどの支配力は持たないにせよ、少なくとも消極的には影響を及ぼすことが推察できる。⁷⁾すなわち、結果に [AG] や [S-C] が認められるからといって迂言的に表現されるとは限らないが、これらを欠く結果を含む場合には迂言形が阻止されるのである。

[AG] と [S-C] はこの様に概念的にも機能的にも類似しているので、体系を単純化するためこの2つを以下のような素性に統合することを提案したい。

SELF-SUSTAINING: 外部からのエネルギーを受けずに成立する事態
 ([SELF]) を特徴づける素性

5. Shibatani (1975) は、被動者の心理的変化を引き起こす使役は、原動者が直接の作用を及ぼせないため間接的使役と解釈されると考えている。主体の心理的変化及びそれに類する事態は、外部からの支配が及ばないという点で [SELF] と類似した性質をもつが、必ず何らかの誘因を要するという点でこれと区別すべきである。そこで次のような意味素性を抽出することを提案する。

EMOTIVE: 主体の心理的変化, 状態, その表出としての行為を特徴づける素性 ([EM])

[EM] は [VOL] 同様主体が有生であることを要求し、これはしばしば *Experiencer* と呼ばれている。そこで(14)(15)のように結果が [EM] を与えられる使役は、経験者使役 (*Experiencer Causative*) と呼ばれる事がある。

(14) John made Mary cry.

(15) The story made Mary angry.

[EM] は [VOL] や [SELF] と異なり、述語自体に固有の素性と思われるかもしれない。しかし、(14)のもう1つの読み、すなわち指示的使役の解釈においては、通常 [EM] で特徴づけられる *cry* の様な動詞でも [VOL] の行為を表わすという事を見れば、[EM] もやはり事態全体を特徴づける素性と考えべきである。

経験者使役に関しての詳述は後に回すことにして、ここでは一応結果が [EM] で特徴づけられる使役状況が、(14)(15)のように迂言的に表現できる事を認めておく。

以上の考察をここで概括してみると、以下に述べる様な原則が仮定できると思われる。

迂言的使役文は、使役状況において原動者が結果に対し間接的もしくは部分的支配しか及ぼさない事を含意する。一方、語彙的使役文は、原動

者の直接かつ密接な支配を含意する。前者の含意を導く意味素性としては、結果を特徴づける [VOL] が最も有力で、その他、同じく結果の [SELF], [EM] もその素因となり得る。

経験者使役についてももう少し詳しく考えてみる。結果を特徴づける [EM] は、表現の選択において [SELF] よりさらに消極的にしか働かない。経験者使役には、(14)(15)のように迂言形で表現されるものもあるが、語彙形で表現される場合も多いのである。ただし、その場合の心理状態を表わす形容詞の方は、たいてい対応する使役の他動詞の過去分詞と同形である。

経験者使役が迂言的に表現される時と語彙的に表現される時の違いについて、McCawley, N. (1976) に興味深い指摘がある。

(16) The news made Mary happy / gloomy.

(17) The news surprised / pleased Mary.

(18) a. I am very happy / gloomy. I don't know why.

b. ?*I am very surprised / pleased. I don't know why.

(19) a. Mary was surprised at the news.

b. Mary was pleased with the news.

彼女によれば、(17)は(16)に比べより密着した因果関係を含意し、これに対応する形容詞表現も (18b) の逸脱性に示される通り、ある特定の原因により生じた状態であるという含みをもつと言う。このタイプの形容詞が、通例(19)の様に特定の前置詞を伴った Stimulus を表わす名詞句と共に用いられ、使役表現でないにもかかわらず因果関係を明示するという事実も、彼女の議論の裏付けとなるであろう。

McCawley, N. の指摘する因果関係の密接さは、我々の原則における原動者の支配の直接性という概念から導かれるものであろう。従って上述の考察は我々の原則と合致すると言える。

経験者使役のうち、(14)や (20b) (21b) は他とは別に下位分類すべきかもしれない。

- (20) a. *The sight of Poirot winced her.
 b. The sight of Poirot made her wince.
- (21) a. *Fear shivered John.
 b. Fear made John shiver.

これらの特徴は、原動者が被動者の心理に影響しているには違いないが結果が被動者の心理的变化そのものでなく、その表出としての動作であるという点である。従って、原動者の支配は他の経験者使役よりさらに間接的だと言える。そこでこの様な状況を表わす語彙形が、(20a)(21a)に示す様にほとんど存在しないという事実も又、我々の原則を支持するものと考えてよいだろう。

6. 最後に、狭義の間接的使役、すなわち、使役の連鎖を含む状況について考える。

- (22) a. ?John opened the door by pushing Mary against it.
 b. John caused the door to open by pushing Mary against it.
 (Yamanashi 1977)
- (23) a. ?John broke the glass by ordering Mary to raise the temperature to over 100 degrees.
 b. John caused the glass to break by ordering Mary to raise the temperature to over 100 degrees. (ibid.)

(22)の状況では、John pushed Mary against the door. → Mary pushed the door. → The door opened. の様に使役状況が連鎖して存在している。この間接的使役においては、原動者が直接被動者に働きかけることがない。従って、(22)(23)に示される様に、これらが迂言的のみに表現される事は、我々の原則と合致する。

抽象的事物や他に向けて作用する力を持たない物体が原動者と考えられている状況は、原動者が被動者に働きかけていないという点で上述の状況と類似しており、この場合も通例原則通り迂言形のみが許される様である。

- (24) a. ? John's clumsiness broke the window.
 b. John's clumsiness caused the window to break.
 (Chomsky 1972)
- (25) a. *The sweat shined his black skin.
 b. The sweat made his black skin shine.

一方、(24)(25)と同様の無生の原動者を含む状況であっても、原因が active と解釈されるなら、他に原動者の直接支配を妨げる要因のない限り、以下の様に語彙形が用いられる。

- (26) Wheels effectively rolled the piano out of the door.
 (Gruber 1976)
- (27) The recent typhoon destroyed our garden.

7. これまで各所において、使役の他動詞の欠如を、それが表わそうとする状況に含まれるある意味素性が語彙形を阻止するために生ずる体系的空白 (systematic gap) として説明してきた。これはおそらく普遍的な空白と大部分重なると思われる。もちろん、それ以外に各言語に特有の偶然的空白 (accidental gap) も存在するに違いない。しかし、我々がここで問題としたいのはその逆の現象、すなわち、我々の仮定に反し結果が [VOL] で特徴づけられているにもかかわらず語彙的使役文が用いられるといった場合である。我々の仮定は統語構造と意味の関連についての原則であって、このような事実は語彙項目の特異性として処理せざるを得ないだろう。しかしながら、以下に示す通り、その様な語彙形が存在する場合もそれとほぼパラフレーズ関係にある迂言形と比較してみると、両者の間には含意の相違が認められ、その対比を見るとこれらは必ずしも我々の原則の反例とはならないのである。

Shibatani (1975: 46) によれば、指示的使役を表わす *make* と *have* による迂言形は、使役の強制度に関して異なる含意を生ずる。これは裏返して

考えれば、結果を遂行するに当たっての被動者の不本意さ (unwillingness) に関する含意の差違である。Make, haveに強勢を置くと(28)の様な容認性の違いが生ずるのは、この理由によるという。

- (28) a. I $\left\{ \begin{array}{l} \text{MADE} \\ * \text{HAD} \end{array} \right\}$ him go to the party because he didn't want to.
 b. I $\left\{ \begin{array}{l} * \text{MADE} \\ \text{HAD} \end{array} \right\}$ him go to the party because he wanted to.
 (Shibatani 1975)

一方、同じく指示的使役で 'CAUSE to GO' を意味する語彙形 *take* が存在するが、この場合にはいずれの含意も生じないのである。

- (29) a. I took him to the party because he didn't want to.
 b. I took him to the party because he wanted to.

上の事実は、語彙形がたとえ[VOL]の結果を含んでいても、その使用において被動者の意志は話者の認識上無視されているに等しい事を示していると思われる。

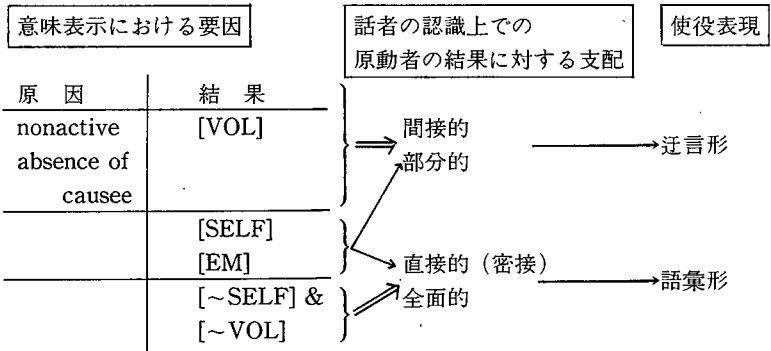
さらに、2種の表現が共存して指示的使役を表わす場合には、原動者が結果においても被動者に随伴しているという含意が、一般に語彙形にのみ生ずる様である。(29)では原動者は彼と共にパーティーへ行き、(31)では動物に乗って跳んだのである。従って(31b)は奇妙な文となる。

- (30) a. The trainer made the horse jump over the fence.
 b. The ringmaster made the lion jump through a hoop.
 (Konishi 1980)

- (31) a. The trainer jumped the horse over the fence.
 b. *The ringmaster jumped the lion through a hoop.
 (*ibid.*)

このような含意の相違を何らかの意味素性によって表示するべきかどうかは、さらに検討する必要がある問題である。しかし、以上の観察は、原動者の結果に対する支配が、部分的又は間接的であると認識されるならば迂言的に表現されるという原則の妥当性に関し、確かな証拠を与えるものと思われる。

8. 以上の考察から、2種の使役表現の選択のメカニズムをまとめてみると以下の様になる。



使役の表現形式は、究極的には、話者がその状況において原動者の及ぼしている支配をいかに認識しているかについての二通りの概念形式の反映であると言わざるを得ない。そして、これは2で紹介した Shibatani の仮定とほぼ同じ事を意味する。原動者が全支配を握っているなら、当然結果の事態において主体である被動者には何の支配力も認められず、このような場合、結果を原因から分離して概念化することが困難となるため、使役状況は単一の事態として認識されるのである。

しかし本稿の目的は、この2通りの概念形式に意味論的根拠を与えることであった。我々の体系では、上図の左列に示す様な意味論的性質が、矢印で表すように表現決定の基本的要因として働いている事を明らかにできる。例えば、結果が [~SELF] [~VOL] である状況では、原動者が全面的に結果を支配しているとしか考えられない。そこで語彙形によってのみ表現されるのである。(例文(4)(1)(3)参照)

ここで抽出された意味素性は、多様な使役文の意味の識別や、さらにはある種の統語現象の説明にも有用のものと思われる。これらをいかに述語とその項の意味的格関係と関連づけるか、またどのような形で統語論の分析に取り入れるかといった問題は、今後の研究の課題である。

注

- 1) Fodor (1970), Shibatani (1975) 参照。
- 2) 原動者が被動者に指示を与えて行為させる状況を指示的使役、物理的な作用を及ぼし結果へと導く状況を物理的使役と呼ぶ。
- 3) 迂言的使役文においては、時・場所を表わす副詞句の作用域に関し、次の2通りの解釈が可能である。(1)原因・結果が共にその時点(場所)で起こった。(2)結果のみがその時点(場所)で起こった。これに対し、語彙的使役文では(2)の解釈が不可能である。従って(3b)は逸脱する。詳細は Shibatani (1975: 100) 参照。
- 4) この様な分析の妥当性については、Dowty (1972), Miller & Johnson-Laird (1976) など参照。
- 5) Cruse (1973) では従来の Agentivity という概念がいくつかの素性に分解される必要性が示されている。
- 6) Inoue (1973) は、使役文の目的語が無生である場合に限定して、この素性を適用しているが、これは主体の性質からは独立したものであり、事態を特徴づける素性として設定すべきである。
- 7) Inoue (1973) によれば、日本語やフランス語では結果が[S-C]ならば義務的に迂言形で表現されるという。

参考文献

- Chomsky, N. (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*.
The Hague: Mouton.
- Cruse, D. A. (1973) "Some Thoughts on Agentivity," *Journal of Linguistics*, 9.
- Dowty, D. R. (1972) *Studies in the Logic of Verb Aspect and Time Reference in English*. Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Texas.
- Fillmore, C. J. (1968) "The Case for Case," in E. Bach and R. T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fodor, J. A. (1970) "Three Reasons for Not Deriving 'Kill' from 'Cause to Die'," *Linguistic Inquiry*, 1.
- Givon, T. (1975) "Cause and Control: On the Semantics of Interpersonal Manipulation," in J. P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics*, Vol. 4. New York: Academic Press.

- Gruber, J. S. (1967) "Look and See," *Language*, 43.
 ———. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*.
 Amsterdam : North-Holland Publishing Company.
- Inoue, K. (1973) "Self-Controllability and Self-Changeability,"
Descriptive and Applied Linguistics, 6. International Christian
 University.
- Konishi, T. (1980) *A Dictionary of English Word Grammar on Verbs*.
 Tokyo : Kenkyusha.
- McCawley, J. D. (1971) "Prelexical Syntax," in R. J. O'Brien (ed.),
Monograph Series on Language and Linguistics. Georgetown
 University Press.
- McCawley, N. (1976) "On Experiencer Causative," in M. Shibatani (ed.),
Syntax and Semantics, Vol. 6. New York : Academic Press.
- Miller, G. A. & P. N. Johnson-Laird. (1976) *Language and Perception*.
 Cambridge, Mass. : The Belknap Press of Harvard University Press.
- Shibatani, M. (1975) *A Linguistic Study of Causative Construction*.
 Ph. D. Dissertation, distributed by the Indiana University
 Linguistics Club.
- . (1976) "The Grammar of Causative Constructions : A
 Conspectus," in M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics*,
 Vol. 6. New York : Academic Press.
- Yamanashi, M. (1977) *Generative Semantic Studies of the Conceptual
 Nature of Predicates in English*. Tokyo : Kaitakusha.